

ハルマゲドン考察 5 ー集結場所は、ヨシャパテの谷

このレポートは「ハルマゲドン考察」シリーズ 1/2/3/4 の続編という位置付けになります。

前々回の記事で示しましたように、主は、「メギドの丘」ではなく、エルサレムを象徴するシオンから、その王権の行使を開始されます。

しかしその前に、「裁き」を執行するために、至近のオリーブ山に立たれます。

「わたしは、すべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。・・・

主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。

その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。

山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。・・・私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。」

(ゼカリヤ 14：2－5)

そうです、主は、エルサレムを攻めるために集結する全地の王たち（おそらく実際は、その特命を受けた代表の軍隊）と戦うために「出てきて」オリーブ山に立たれるということです。

そのため、オリーブ山は南北に二分されると言われています。

それにしても何故、「オリーブ山」なのでしょう。

それには、それなりの理由があるようです。

その理由と考えられるのが、イスラエルに嗣業として与えられた土地の境界線が関係しているようです。

それを確かめるために、まずヨエル書を読んでみましょう。

「わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。」(ヨエル 3：2)

「諸国の民は起き上がり、ヨシャパテの谷に上って来い。わたしが、そこで、回りのすべての国々をさばくために、さばきの座に着くからだ。」(3：12)

「さばきの谷には、群集また群集。主の日がさばきの谷に近づくからだ。」(3：14)

まず、「ヨシャパテの谷」についてですが、「ヨシャパテ」とは「ヤハウエは裁かれた」という意味ですが、ここでは音訳されていますが、続く節「さばきの座 (3:12)」「さばき [審判] の谷 (the valley of decision) (3:14)」から見てもここは、固有名詞としてではなく、普通に「ヤハウエの裁きの谷」と訳されるべきところだと思われます。

実際、「ヨシャパテの谷」という地名は存在しません。

ただ、ユダヤ人の間ではこの「ヨシャパテの谷」とは、キデロン (ケデロン、キドロンの谷) のことであると解されているようです。

それで、ハルマゲドンの時に、諸国が集結する場所は、「メギド」ではなく、オリーブ山、あるいはその時に生じる「山々の谷 (ゼカリヤ 14:5)」あるいは「ヤハウエの裁きの谷」であるということがわかります。

さて次に、決戦の場がオリーブ山 (周辺地域) である理由についてですが、もう一度ヨエル 3 章 2 節に注目して見てください。

「その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。」

「その所」である理由は「「ゆずりの地」「わたしの地を分け取ったから」というものです。

しかし、「その所」つまりオリーブ山あるいはキデロンの谷で、諸国民がイスラエルに行った特筆すべきこと、という具体的な出来事は歴史上に見つかりません。

やはりこれは、領土的な、いわゆるパレスチナ問題に何らかの関わりのある所なのかも知れません。

もともと、現代のパレスチナ問題は、為政者による勝手な振る舞いによって生じているもので、そこに住む、パレスチナ人には何の責任もないでしょう。

しかし、神は先見により、その地域こそが、係争の焦点となることを示しておられるのです。

民数記 34 章やヨシュア 15 章には、イスラエルがカナンに入る時に定めた境界について書かれています。そして東の境界線は「塩の海」つまり死海であることが示されています。さてここで最後に注目しておきたいのが、ダニエル 11 章の最後の節に示される「北の王」の行動です。

「しかし、東と北からの知らせが彼を脅かす。彼は、多くのものを絶滅しようとして、激しく怒って出て行く。彼は、海と聖なる麗しい山との間に、本営の天幕を張る。しかし、ついに彼の終わりが来て、彼を助ける者はひとりもない。」(ダニエル 11:44、45)

「北の王」すなわち反キリストは、最終的に、海と聖なる麗しい山である「シオンの山」との間に、天幕を張るということですが、上記のことを総合するとこの「海」は、一般に解釈されている「地中海」ではなく、「塩の海」つまり紅海であるに違いありません。

タイミングとしては、まず、第6の鉢のときに、「竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるのような汚れた霊ども」によって「神の大いなる日の戦い」に備えて招集されるわけですが、この後、第7の鉢が注がれ、大バビロンが滅ぼされて、「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。」「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となりました。」という宣言がなされた後のできごとそして次のように記されています。

「獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。」(黙示 19:19)

ですから、「ハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。」(16:16)と過去形で書かれていますが、おそらくそれは、招集をかけたということで、実際に集まったのは、10本の角と獣によって「その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くす」という「大バビロン」に対する処置を行なった後で、引き続いて「エルサレム」を攻め落とす目的で「ヨシャパテの谷」に集合するということでしょう。